

■ ■ ■ 編 集 後 記 ■ ■ ■

■この正月はどこへも行かなかったので、自宅で次のシリーズ小説を読んでいた。浅田次郎「壬生義士伝」、藤沢周平「たそがれ清兵衛」「用心棒日月抄」、平岩弓枝「御宿かわせみ」、宇江佐真理「髪結い伊佐次捕物余話」「雷桜」、宮部みゆき「本所深川ふしぎ草紙」、北原亜以子「慶次郎縁側日記」。もちろんそれぞれのシリーズはかなりの分量があり、例えば「御宿かわせみ」などは文庫本で29冊もある。正月だけで読み切れる代物ではない。ここ数年間好んで読んでいた作家たちである。この作家たちのテーマには共通性がある。取り上げているのは江戸時代の下級武士と下町庶民の切々とした生活情話なのである。■明けて、会誌105号の校正をしていたら、巻頭言を書いた伊藤昌勝氏が、「壬生義士伝」と「たそがれ清兵衛」を取り上げている。東北地方の南部藩盛岡を故郷として、新撰組に加入し京都で活躍した吉村貫一郎。同じく貧困な米沢藩で、病弱な妻と困難な暮らしを送る井口清兵衛。両者の生活信条は、並のサムライのを越えており、いざと言う局面では「強いなあ」と感じさせる。自らの生き様を通して、人間いかに生きるべきかを真摯に問いかける。■伊藤氏は、いさぎよいサムライの精神は「生まれ育った社会全体に漲っている伝統文化のなせるものでしょう」と述べ「伝統文化に根ざした教育が喫緊の課題」であると技術士に提言している。■「Air Mail to 北海道」は、会誌65号(1991.10発行)に初めて登場したコラムである。このとき広報委員会も総改選され、内田辰英委員長以下7名のそうそうたるメンバーがそろった。以来若干の休止期を挟みつつも40号14年間に亘って掲載された。「エンジニアパーク」や「Q&A コーナー」もこのときから続くコラムである。会誌105号は「Air Mail to Hokkaido」を小特集とした。「北海道」ではなく「Hokkaido」である。サブタイトルも「海外に於ける技術士の活躍」ではなく「技術士の海外報告」である。当時から比べると技術士の海外活動の内容もずいぶん身近になった。小特集の6編は、どの報告もその内容を具体的に述べている。■表紙写真は、会員の好評を得て、委員長会議の承認のもと、105号以後も引き続き掲載することとした。写真の趣旨は、時々の技術士会のテーマを反映しつつも、出来るだけ北海道の自然風物を対象としたものということにする。さっそく斉藤副支部長が「雪のナナカマド」のすばらしい写真を応募して下さい、氏の多彩ぶりを遺憾なく発揮されている。広く会員から作品を募集しますので、広報委員会宛に応募して下さい。

(第105号 編集担当 二ツ川 健二)